

“A good soldier to a lady; but what is he to a lord?”

——『空騒ぎ』における笑の輪ホイール

竹村はるみ

「女性に対しては立派な武将ね。だけど、殿方に対してはどうかしら。」——『空騒ぎ』(Much Ado About Nothing)の冒頭場面、ヒロインのベアトリスは、女嫌いのペネディックのことをこうからかう。これは、日頃から女性を嘲弄してはばからないペネディックへの皮肉であるが、興味深いのはその問いかけの部分である。女性をからかうことは得意でも、同胞の男性を同じように愚弄することは果たしてできるか——女性ばかりを攻撃するペネディックの機知の陰には他の男性に対する媚びや遠慮があることを、ベアトリスは鋭く指摘しているのである。ベアトリスの皮肉は、この劇の機知が性差や階級差に基づく行動規範を強く意識したものであることを、いみじくも言い表している。

ルネサンス期の笑いが現代のそれよりもはるかに社会性を帯びていたことはよく知られている。風刺的要素の強い冗談を好む当時の社会において、笑いは共同体の規範を逸脱した者に対して向けられる傾向があった。滑稽本や喜劇における「寝取られ亭主」にまつわる冗談の人数ぶりからも窺えるように、笑いは共同体から外れた行為に対する一種の社会的制裁として用いられた。冗談は社会に鬱積する様々な不安や緊張のはけ口であり、笑いは同じ価値観を有する者をつなぎとめる、いわば接合材の役目を果たしたのである。

「機知の喜劇」(wit comedy)を形容される『空騒ぎ』は、シエクスピアー(William Shakespeare)の作品の中でもとりわけ、女性や結婚をめぐる嘲弄や諧謔に富むことで知られる。この劇における性差や階級差の主題は、従来より批評家の関心を集めてきた。しかし、それが劇の中でいかに笑いに還元されているかという問題は看過されてきた傾向がある。本論は、この劇の機知や笑いの分析を通じて、その奥に潜む様々な社会的価値観の葛藤を解明しようとするものである。

議論はまず、フロイトが機知の分析において揭示した心的モデルを参照しつつ、冗談を仕掛ける者、その冗談を聞いて笑う者、そして笑われる者という三者を軸に構成される笑いのネットワークに着目した。フロイトは、ある目的や意図のもとに発せられる「偏向的な機知」には一般に三人の人物が関与することを指摘している。滑稽という現象自体は、冗談を言う人間と、その者が滑稽であると感じた人間、すなわち笑われる人間の二者のみによって作り出される。しかし、誰かをからかう目的で発せられる冗談になると、それを冗談と見なして笑う聞き手の存在が必要となる。攻撃的な機知が悪口としてではなく機知として成立するかどうかは、あくまで聞き手の反応次第と言える。そして、冗談を発する者と聞き手が同じ機知を笑うためには、そこに何らかの心理的な連体感が存在することが前提となる。

先に言及したベアトリスの台詞は、機知を言う者と笑う者とのこの共犯関係を痛烈に指摘したものと解釈できる。ペネディックの女性攻撃の毒舌は、必ずしも女嫌いというペネディックの個人的志向のみから生じるわけではない。ペネディックが反女性的な暴言の数々を吐く背後には、それを笑いでもって歓迎する男性社

会が存在する。ペアトリスの批判は、ベネディック個人に対してというよりも、その笑いのなれあいとも言わべき社会構造に向けられているように思われる。

たしかに、ベネディックの機知は、聞き手の存在を過度に意識したものとなっている。例えば、ベネディックは道化呼ばわりされることに対する嫌悪感をあらわにするが、ここには当時のジェントリー階級の笑いに対する自意識過剰とも言える態度が示唆されている。ルネサンス期に人気を博した礼儀作法書は、いずれも会話術にかなりの重点を置いている。当代随一の礼儀作法書であるカステイリオネ (Baldassarre Castiglione) の『宮廷人』(The Book of the Courtier) は、この劇の出所の一つとされているが、その第二巻の大半は貴族階級の冗談に関する作法と心得に関する議論に費やされている。ここでは、貴族階級の冗談と職業道化のそれとの明確な区別をつける必要が強調されている。身分や性別に基づく行動規範を重視したルネサンス期においては、笑いに関してすらも厳密な約束事が設けられていたのである。ベネディックの危惧は、笑いの社会的側面を意識化したジェントリー階級の行動規範のパロディーとれる。

以降の議論は、観客反応という観点からこの劇の機知のやりとりの演劇的効果について考察した。舞台上で発信される笑いのネットワークに取り込まれるのは、登場人物だけではない。登場人物同士の騙しあいやプロットの主軸になっているが、それらに関する評価は一部始終を見守る観客自身に委ねられることになる。観客は、一方の計略には笑みを浮かべ、他方の計略には眉をひそめるうちに、入れ替わり立ち替わり登場する「笑いの仕掛け人」達に自然と善悪の区別をつけるようになる。どの程度までを罪のな

い遊びとして笑いでもって許容するか、どれが単なる悪ふざけでどれが悪だくみか——そういった判断を観客はたえず迫られることになる。そして、その判断は、悲劇性と喜劇性という対立する要素を合わせ持ったこの劇の進行と共に次第に混乱していく。

観客は、はじめと遊び、悲劇と喜劇の狭間で右往左往する中で、笑いのもつ社会性を改めて認識させられる。冗談の限度や範囲に関する基準は決して固定されたものではなく、そのずれが悲劇をも喜劇をも生み出す。笑いのネットワークもまた、共同体の揺れ動く価値観と共に形成と変形を繰り返す。『空騒ぎ』は、社会的行動としての笑いそのものを実に巧みに前景化させた作品と言えるかもしれない。それは、時代を越えて、客席の私たち自身の笑いをも試しているかのようである。